

Title	フィエスタ論争をめぐって : フィリピン祝祭の一側面
Author(s)	梶原, 景昭
Citation	年報人間科学. 1984, 5, p. 25-37
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11047
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

大阪大学人間科学部〔一九八四年二月〕
『年報人間科学』第五号 二五頁—二七頁

ファイエスタ論争をめぐるつて

——フィリピン祝祭の一側面——

梶原景昭

フィエスタ論争をめぐって

——フィリピン祝祭の一側面——

I

フィエスタはカトリック教徒が大多数を占めるフィリピン最大の祝祭として、またキリスト教以外の祝祭を表現する枠組としてさえ拡大解釈されて、フィリピン文化の中心的な現象とみなされている。ところがフィエスタに関する「常識」からの記述、あるいは「政策的」なコメントは数多く提出されているものの、文化研究の立場からの探究はほとんどないといってよい。こうした状況のなかで、この小論では、むしろフィエスタをめぐる優越した論調に触れつつ、文化現象としてのフィエスタが示す問題の一端を素描することにする。現在フィエスタが語られる典型的なディスコースに注目することは、祭儀の本質や構造という基本的問題からはずれるようである。実はそのうちではない。むしろそこに文化現象としてのフィエスタの意味がよく示されているのであり、一見して「まやかし」とか「やらせ」と感じられる現象をぬきにして、今日のフィリピン文化の状況理解は、覚つかなのである。こうした先入見はいずれ変化するであろうが、まずわれわれが祝祭に期待する解放性や自由といったものへの裏切

りから出発することが必要であろう。事実フィエスタに対するフィリピン人のびとの反応も、きわめて伝統的な行事に対する讃嘆とまつたくの「しらけ」という両極のあいだに存在している。

常識的なディスコースが語るフィエスタは、それがフィリピン文化を回顧する文章であれ、観光パンフレットであれ、つぎのようなものである。一九五〇年代に変化のなかのフィリピン文化慣習を論じたマラリ（一九五四年）の記述をまとめてみよう。

フィリピン人の「もてなしの良さ」はほとんど伝説的なものであり、なにごとか理由をみつけては人びとが集まりパーティーを催す。その最大のものはフィエスタの場合であろう。このパーティーには招待状もいらぬし、だれでも客人として歓迎されるのだ。こうしたパーティーには大層な準備が必要であり、フィエスタを前にした家々や市町村の街路は磨きたてられ、飾りつけが施される。もちろん祝祭の食事の用意にも怠りはない。そして晴れ着も。当日になると親族や友人が訪れ、花火が打上げられ、楽隊が広場や街路をパレードする。広場には屋台が並び、舞台では芝居の上演が始まる。教会のミサも忘れてはならない。いくら金と労力がかかろうとも、多勢の客を招いて祝宴をはることをきらうフィリピン人はいない。良

き時間を過ごし、祝宴の主人役を努め、守護聖人に感謝を捧げる以上の嬉びがあるうか。

こうしたフィエスタが第二次大戦後独立したフィリピンの国民国家形成期に統合の象徴として、さまざまに利用されてきたことはごく当然といえよう。個人的かつ地域的な体験（全国的には行なわれていても）としての重要性から、国家的でより集合的な象徴への比重の変化が期待され、また試みられたのが、ここ二〇年間ほどのフィエスタの現状ではなかつたらうか。

第二次大戦前一九二〇年代から三〇年代にかけてのセブのフィエスタについてもつとも伝統的な街区パリアンの住人であったC・ブリオーネス（一九八三年）は次のように語る。

「家々は床から天井までの大掃除を済ませ、家の前の歩道はとくに念入りに浄められる。家族を訪れる大切な客人が祝祭の行列を眺める窓には、明かるい色の祝祭旗が取り付けられる。……道路に面した窓は大きく開かれ、人びとは午後の行列を待ち望む。行進がやってくる小一時間ほど前に、燭台のロースクを灯もす。大ロースクに灯をともすのは女家長の役割で、フィエスタの聖像をのせた台車がやってくる瞬間に火がつけられる」……「レイテ島のアナハワンや〔セブ島の〕カルカルその他の地方からいとこたちが訪れ、道の端の特等席から行列を眺め、おしゃべりに興ずる。……フィエスタに備える家の飾りがみごとなものであるといつても、ごちそうの盛大さには及ぶべくもない。それは一週間も前から準備して、行列が通りすぎたあとに供される」。

こうした念入りの準備をしてフィエスタを待ち望む人びとの雰囲気は今日でも共通してみられる。ただしセブ市民によれば、都市レベルでのフィエスタには昔日の賑わいと興奮の面影はないというのが大方の意見であった。家庭に客を招き、祝祭日の献立で飾られたテーブルを囲み、いつ果てるともない祝宴をはるという光景はむしろ町村レベルで現在なお行なわれている。

しかしながらこれまでいくつかのフィエスタに参加して、そこに祝祭性の横溢を強く感ずることはなかつたのである。フィエスタ日の早朝、教会で行なわれるミサも、それに続く宗教行列も、余興のフィエスタの女王コンテストや射的とかカード・ゲームの屋台もそれなりに面白かつたり、厳肅ではあるものの、期待が大きすぎることもあつて、とても手放しで感嘆するところまではゆかなかつた。どちらかといえば期待はずれで、儀礼的逆転とかコミュニケーション性とは無縁といつてよい。フィエスタに大きな変化が生じたのか、それとももともとフィエスタは現存する秩序の再確認を行なうことに特徴を有するものであつたのか。本稿では、しばしばフィリピン文化の精髓と呼ばれ、もつとも代表的な文化的パフォーマンズとして位置づけられるフィエスタをめぐる、とくに一九六〇年前後のフィエスタ論争と、一九八〇年代の新らしい大規模なフィエスタの創成に関する論議を中心として、フィエスタと社会の問題を検討してゆきたい。

II

現在のところ典型的な町・村レベルでのフィエスタの見取図としてもっとも簡潔でまとまった記述は、D・ハート（一九五九年）がヴィサヤ地方、ネグロス・オリエンタル州の事例を紹介したものである。もとよりそれは単一のフィエスタの全過程を刻明に記述し、象徴的な分析を加えたという性質のものではなく、寄せ集めの事例から一つの平均的なフィエスタの過程の構図と構成要素を示すにとどまっているといつてよい。しかし一応の理解と情報を手に入れるうえで役に立たぬわけではない。そこでしばらくハートの記述に拠ることとしよう。

フィエスタは都市や町村などの社会的分節それぞれの守護聖人への崇敬と祈願成就感謝をまず第一の性格としている。守護聖人は日常生活のなかで必ずしも意識されているとは限らず、フィエスタがどの守護聖人に捧げられているか、聖イシドロなのか聖母マリアなのかはつきりとは返答しない、あるいはそうした関心を持たぬ住民の数も少なくない。

ふつうフィエスタ日は各々の地域の守護聖人の祝日（カトリック教会暦による）と重なりあうことが多いが、隣接地区のフィエスタ日との重複を避けるために、あるいは利便によって暦日と一致しないこともある。常識として（その真偽はともかくも）最近はずますますフィエスタにおける宗教的な意味と範囲が減少し、世俗的なものになりつつあると人びとは語る。ダンス、宴、賭博そして慈善や学

校改修のための基金募集などが量的にも祝祭の過程の大半を占める。事実はたしかに存在している。しかしそれを歴史的な変化や世俗化、あるいは信仰の風化と結びつける根拠はない。

ハートはフィエスタにおいて宗教性が横溢する現象として以下の四点をあげている。まず、フィエスタ日に至る九日間毎日行なわれるノヴェーナ（祈りの集まり）があり、ヴェスペラスと呼ばれるフィエスタ日の前日に終わる。第二はヴェスペラス日ないしはフィエスタの当日（カホロガン）の歌ミサである。第三はとりわけ常駐の司祭なき村落でみられるフィエスタ期間中の集団洗礼であり、かつては年に一度町の教区から司祭が村落を訪れて洗礼式をとり行なつたという。最後に、フィエスタ日に実施される宗教行列である。守護聖人像を中心にした行列（楽隊、宗教旗、ローソクを持つ人びとなどが構成要素である）がそれぞれフィエスタの単位となる村落、町、都市といった社会的空間を巡行する。

一応便宜的な区分に従うと、娯楽も含めてより社会的な文脈にあてはまる活動として、主たる宗教的行事が集中するヴェスペラスとカホロガンの日以前から開始されるダンス大会、バスケットボールその他の運動競技、親族や友人を招く社交、フィエスタの女王を選ぶ美人コンテスト、約二週間にわたる移動カーニヴァルないしフリア（フェア、屋台店、小規模な遊園地、行商人などの諸活動）、学校や軍隊、官庁などの構成単位を中心に参加が行なわれるパレード等をあげることができよう。

各地区の広場（プラザ）を中心にしたフィエスタの会場には、オ

「デイトリアムと呼ばれる仮設の舞台を囲む空間が出来上がり、その中で前記の諸活動が行なわれる。現在では、その入場料は一〜二ペソ（約二二円〜四四円）で、日によってダンスがあったり、特別の見世物上演されたりする。美人コンテストもここを会場として女王の披露が行なわれる。水着の審査までが含まれる事例もあるが、多くは自薦他薦の候補者への投票（候補者は地域集団の成員であり、改めて審査するのでなく、彼らへの投票切符を買うことの結果寄せられた寄附金、あるいは候補者自らが売上げた切符の金額を票数に換算する）で決定される。コンテストの投票（実際には現金）の総額はすべてフィエスタの費用として運用される。

教会と広場を中心とする行事に対し、各家庭では宴会や社交がフィエスタの当日ないし前日にくりひろげられる。フィエスタがたとえば都市の大規模な見世物としての行列やパフォーマンスを含む場合には事情が異なるが、町レベルの場合には、他の場所からの訪問客の関心はどこでも画一的な行事にあるのではなく、もっぱら家庭内での飲食と歓談に集中する。極端な場合には、外部から直接家庭を訪問するだけで、フィエスタを見たり、なんらかの行事に参加することなく時間を過ごす。

ふつうフィエスタの実施運営を担当するのは各活動ごとに組織された委員会であり、行政機関との密接な連繋のもとに、たとえばフィエスタを支える中心人物の集まり、広報や紹介を行なうコミティ、運動競技を担当する部会、会場の設営や装飾の担当、収支決算の担当、電力その他を確保する人物などの区分がある。

III

実際フィエスタの過程、要素、組織は一つの社会の縮図といってよく、観察者の眼には必ずしも魅力的に映るか否かはべつにしてさまざまな文化的な価値がそこに表現されているのである。たとえば一九八三年八月にセブ島のカルメン（人口約三万の町）で行なわれたタウン・フィエスタの素描を示すことにする。その際参照するのは、フィエスタ当日と前日の観察とインタヴュー、さらにプログラム等の印刷物である。

ある程度以上の規模（おおよそ人口数万の町より大きな地区のフィエスタを考えてみればよい）をもつフィエスタでは、ほとんどの場合フィエスタ・プログラムが発行され、外部に配布される。カルメンの場合、人間の範囲を示すものとしてカトリック司祭と農民および漁師、つぎに教会、プラザ、町庁舎などのランドマーク、この地域を代表する生業に関係する砂糖キビ、養魚池、ココヤシの木などをあしらった表紙をもつ、写真入りの約四〇頁の英文プログラムが発行された。順を追ってみると、まずセブ県知事、同副知事、フィリピ第七管区（セブ県が含まれる）警察軍地区司令官、セブ大司教、カルメン町長、同副町長、カルメン教区司教、カルメン町フィエスタ委員会会長の順であいさつが続く。いずれのメッセージにも共通する点は、その宛先が、信仰心篤く良き町民としてのカルメンの住民になっており、神および守護聖人への敬愛、社会開発の重要性、住民の連帯感の増進、政府行政機関と住民との相互理解の進展、文

化伝統に対する言及がみられる。一例をあげると次のようになる。

「われわれの社会のような民主的な社会においては、平和を愛する住民こそ社会の中核的な存在といえましょう。そして信仰と文化伝統の存在は、われわれがくりひろげている社会開発に向かう努力に色を添え、また意義づけを与えるものであります。われわれの毎年恒例のフィエスタこそ、人びとの心に深く根ざした伝統の現われであり、自由な人間としての力強い連帯の表現といつてまちがいありません。人びとはこの毎年訪れる機会を待ち焦れていたのです。社会のあらゆる領域から集まった指導的立場の人びとがこの機会を入念に計画した次第であります。このフィエスタを実施するための財源や人と、そして知識や技術は、この機会がもつ意義を十分に發揮させるように、とことんまで磨きぬかれ集約化されています。

フィエスタの祝いは社会全体の企図であります。それに鑑みて私は、すべての人びとが力を合わせ、政治的な信条の違いなど棚上げするように提案致します。信仰のためだけにではなく、この町の発展と繁栄のため、そしてとくにフィリピン国家のためにわれわれは手を携えようではありませんか。

私も私の家族も信仰篤き人びととともに敬愛する守護聖人聖オーガスティンに祈りを捧げることに致しましょう。愛すべき同僚の町民と敬愛すべき来客の皆様にごあいさつを捧げつつ。(カルメン・フィエスタ・プログラム、一九八三年)

もちろんこれは政治的なディスクールにもとづくあいさつではある

が、こうした意図はともかくとして、ここに示されたフィエスタ理解は実のところ住民の視点とそれほどかけ離れてはいないのである。

メッセージに続いて、町の要覧の一部、すなわち、町の行政担当者一覧、町の行政区分に含まれる下部分節(バランガイ)の長の名簿、今年のフィエスタ役員名と分担(上部統轄委員会、財務、広報、広告集め、警備とパレード、賞品、清掃、運動競技、装飾、設備、美人コンテスト、女王戴冠舞踏会、会場および席の割当て、音響と照明、進行の諸委員会)が挙がっている。そのつぎにこの町の現職教員名一覧、そしてフィエスタのスケジュール表が記されている。さらに美人コンテスト(過去、コンテストが過熱しすぎた経験から、ここでは未婚の女性でなく、若い既婚女性の美人コンテスト。しかもここ数年の経過をみると、ミス・コンテストに比較して、泥試合になりにくく、逆に投票総数(寄金はより多いとのことである)候補者と、子供のコンテスト候補者(カルメンの王女を選ぶ)の写真が続く。そして、昨年来この町で進展した社会開発の例として、市場の側にできた屋根付待合所、政府援助による低所得者むけの住宅建設プロジェクト、町立図書室を含むコミュニティ・センターの建設、道路の拡充を示す写真のページが続く。いずれにせよこうした「本文」は全四〇頁の三分の一くらいを占める。本文以外はプログラムの発行ならびにフィエスタの実施に寄附金を出したスポンサーの広告であり、隣接するダナオ市(小規模ながら各種鉱工業の所在地)の企業(炭鉱、セメント、金融)、セブ市の商工業(海運、酒、金融、金用油、貿易、保険、小売業)、大学、町内の個人、そして他

所に住むカルメンに縁のある人びとを含んでいた。

八月一日から二八日を期間とする、聖オーガスティンの祝祭は、一日のバスケット・ボールの試合に始まり、ファイエスタ組織委員会、そして地元の海運業者、周囲の市・町・村の職員団体がそれぞれスポンサーになった行事がそれに続く。ファイエスタ日の前夜には、選ばれたファイエスタ王女の戴冠式が行なわれ、ファイエスタ日には午後からパレード（町役人、各学校教員、学生、警察署、ファイエスタ女王、などによる）と夕方のミサが行なわれた。ファイエスタの最後は女王の戴冠式であった。

いくつかの家庭ではファイエスタ用の食事（仔豚の丸焼など）を供し、一日中人が訪れていたが、経済的な状況から、すべての家で祝宴が催されるというわけではない。伝統的なメニューを用意し、晴れ着を新調するだけで平均的な月収とほぼ同額はかかってしまうという現実があるのだから。それでも当日のカルメンは他の地域から多くの人出であふれかえった。

さて以上がファイエスタのおおまかな見取図であるが、「ファイエスタ複合」といった捉え方を通して、それが宗教・社会・経済・政治的な現象であると述べることは可能であろう。要するに全体社会的な現象であり、積極的にその価値を認める人が多いといえるが（それが常識である。けれども文化的価値を認める人間が実践や参与の面でファイエスタに熱心であるとは限らない）、他方パレードを眺めるくらいで、その他の活動には積極的に参加しない人もおり、またファイエスタに批判的な（真のカトリック伝統ではなくむしろ異端的な民

俗文化との混淆と評価したり、浪費傾向を攻撃する）人びとが存在する。またファイエスタと行政との結びつきに懐疑的な意見も強い。いづれにせよ、好むと好まざるとにかかわらず、こうした文化現象は一つの社会的現実を構成する枠組であり、その幅の中でさまざまな表現の可能性をもつ。ファイエスタに対してまったく肯定的な態度から、その否定まで、個々人の態度および反応の偏差を示すことができる現象といつてよからう。

そうした現象に対するアプローチとしてまず必要なことは、一つ特定のファイエスタに関する民族誌の作成であろう。これほど全国的に実施され、また絶えることなく続いている文化表現の形式にして、実際そうした研究がほとんど皆無というのが現実なのである。ここではその前提として、慣習的行動としてまったく所与のものとしてみられてきたファイエスタの存在に問題提起を行なった論議を検討して将来の研究の手がかりとしたい。最初の例は他の東南アジア諸国でも問題とされた、近代化と伝統的価値との関わり合いを背景とする議論であり、第二の問題は、文化伝統をモデルに新たな祝祭を行政的に創成しようとした際に生じた論議といつてよからう。このような議論が存在すること自体、観察者の眼にはなかなかみえぬファイエスタの意味の社会的な重要性の証左といえぬこともない。

IV

第一の例が一九六〇年のはじめ、当時のフィリピン上院議員ラウ

ル・マンングラプスの首唱したフィエスタ改革運動である。この論議の発端は、開発の推進と貧困の克服へ至る処方箋の作成にある。マンングラプス（一九六五年）によるとJ・K・カルブレイスは、第三世界にみられる諸国家の貧困の原因を、成長を刺激するためには欠くことのできぬ資本の欠如にもとめてゐる。そしてこの資本の欠如の大きな原因をつくり出すのが、フィエスタの「浪費」であるという。同時に彼の理解によれば、資本主義経済体制を維持しつつ、革命による後進的諸制度の廃絶を招くことなく、貧困を解決しようとするプログラムが含まれている。当時のフィリピンの状況評価としてマンングラプスは、社会の一般資本は不足していないにもかかわらず、国民の大半は依然として貧困であると述べている。また従来から主張されていた分益小作制度と貧困の関係もそれほど直接的でないといふ彼はいう。

彼の発言は政治的なものであり、フィリピン社会が革命的なフク団反乱の一応の終結を経て、落ちつきをとり戻しつつはあったが、新たな社会改革を余儀なくされていた六〇年代の初めに登場した背景を考慮に入れる必要がある。そこで問題とされたのが、土地改革や社会保障は「進歩」に必要ではあるが、それを十分に保障するのではなく、人間の決意が重要であるという指摘である。人間精神あるいはエートスの問題は文化の問題に尽きるとする彼の主張はそこで宗教と「進歩への動機づけ」との関連性へ向かう。

フィリピンにおける「資本主義の精神」をすべてアメリカの植民地政策（とりわけ教育）に含まれたプロテスタント的影響に帰し、

それに対するスペイン期のカトリシズムこそ、今日の経済的停滞の遠因となったという説が常識的に唱えられていた。ところがマンングラプスは、ヨーロッパにおけるカトリック地域に経済的進歩が皆無でなかったことも考慮して、経済的停滞がスペイン的カトリシズムによるものなのか、あるいはラテン・カトリシズムの特徴である土着文化との混淆による、すなわち前スペイン期的な（要するに彼はアジア的といいたいわけだが）伝統に基づくものかという問を發する。その意味でフィエスタに代表される祝祭制度が検討の対象とされるのである。

マンングラプスの理解では、フィリピンの植民地化が始まると、スペイン人宣教師はフィリピン社会に伝統的に存在した祝宴の機会を教化と布教に利用し、それらの機会をカトリックの暦日に組み込むとした。この結果祝祭にはカトリック的な要素がつけ加わったものの伝統的な本質を残し、今日でもみられる教会行事とより世俗的な行事との二本立ての構造が維持されるに至ったという。必ずしも教会暦とは一致せずに、四月と五月に多くのフィエスタが集中する事実こそ、他のアジア地域にみられる祝祭行事（彼があげているのは大陸部での水祭り、川供養など）との類似性を示すものである。結局彼の結論は、フィリピンの経済的遅滞の主たる原因はスペイン・カトリシズムではなく、それが利用したところの非キリスト教的な土着慣行にあつたという点に尽きる。

その理由としてまず指摘されるのが、生産のための資本が祝祭のために浪費に向けられ経済的停滞の原因となるという点である。ふ

つう一家族がファイエスタに消費する金額は年収の半分にも達するといわれている。その結果慢性的な借金状態が続いたり、資金のために不動産を売却する事態を招く。マングラプスはさらに、こうした事實は単に資本の問題にとどまることなく「生活態度と価値に関する全体的観念の指標」でもあるという。すなわち「ただ今日だけのための思想はあるが、明日のための思想は皆無である。」と彼は断定する。結局アジアの文化は浪費の文化で投資の概念に決定的な欠落があるということになる。

マングラプスのファイエスタ批判はその対象としてただ並はずれた浪費を戒めるのである。すなわち美人コンテストの候補者になった娘をもつ親が娘可愛いさに水牛まで売りとぼしたりする行きすぎに反対なのであつてコンテストそのものに否定的ではない。かわりにこの上院議員は必要な出費をまかない、社会との連繋を深める意味で企業の参加を奨励する。彼は貧困層にのみ節約と節度ある消費を訴えたという批判に対し、富裕層も等しく自制すべきであると答える。そして実践活動として「進歩のためのファイエスタ」運動を提唱している。この運動には、フィリピン産業界からの支持と、ついでにつけ加えればアテネオ・デ・マニラ大学の人類学者たちの協力が得られたという。その結果の一つとして、一九六二年にはいくつかの町をモデル・ケースにファイエスタの改革が行なわれた。ファイエスタの楽しみと興奮を欠いてはこの運動の成功も覚つかぬとの判断で、有料で雇っていた人びとを青年グループやボーイ・スカウトの無料奉仕に変え、美人コンテストばかりでなく、生産性の向上や産業振興をめ

ざして家畜や農産物の品評会、重量挙げなどの運動競技、優秀な青年の表彰を新たなレパートリーに組み入れた。

当時の町のファイエスタの家族当り消費額モデルによると、ファイエスタの一日ないし二日間で通常家族が食べる一週間分の米（七ペソ二〇センチターボ）を使い切り、一週間分の牛・豚肉（一三ペソ）とその他飲み物、食料品、台所器具に三〇ペソ、そして祝祭の晴れ着に一八七ペソ（各人の洋服、靴など。普段着より質もよく高価なもの）、家の中の整備（このケースではカーテンの新調一七ペソ）、義務づけられた寄附に五ペソ、合計二六四ペソ二〇センチターボを支出している。ちなみにこの家族の家長の収入は月二二〇ペソで、他のメンバー（妻）はごく僅かな収入しかない。そのためファイエスタの出費のために高利の金を借りている。こうした収入に見合わぬ出費を法外なものとするかどうかは立場によるし、マングラプスがとりあげるのは村落レベルのファイエスタ（フィリピン全土に約二万五千以上の村＝バリオが存在する）ではなく、千五百の市町のファイエスタである。このレベルの祝祭に浪費とけたはずれの華美がつきものであると彼は批判しているのである。つまり投資や預蓄の可能な階層が多く、収入も相対的に大きい市町におけるファイエスタのあり方が問題となつている。

といつても彼はファイエスタの全面的廃止を主張するわけではない。はもつたもののやがて立ち消えになつてしまふ。しかしながら同様の意見はその後もくり返して登場する。たとえばある雑誌の記事は、当初守護聖人に対する感謝と崇敬を旨とした祭儀が、「山ほど

の食物つきのステージ・ショー」と化したのは何故であろうかと問
い、再度マンガラプスの論点をむし返している。

V

マルコス政権が戒厳令の施行（一九七二年）を経て「新しい社
会」の建設を宣言したのちには、マンガラプスのかつての主張をさ
らに強化して（皮肉なことに彼はやがてマルコスの政敵として合衆
国に一種の亡命生活を送ることになるが）、無駄使いを特徴とする旧
来のフィエスタから意義深い、社会開発を促進するフィエスタへの
転換が試みられる。この政策は、フィエスタに表明され集中する人
びとの想像力と経済的資源に「進歩」への方向性を与え、祝祭の内
容と構成要素を適合的に変えてゆくことをめざしている。

戒厳令施行後の大統領令に含まれたフィエスタの変革に際し、行政
側のより積極的な介入と、新生活運動的な方向づけは、フィエスタの
存在を歴史によって正当化する一方その内容を変えてゆく。そして
さらにフィエスタを観光開発と連動させるようになってゆく。新ら
しいフィエスタの形成は、その時間と資金の「無駄」がより国家的
な規模での威信の発現をめざして用いられるようになるという皮肉
な経過を辿る。すなわち文化政策として、マルコス政権のもとで実は
彼がもつとも攻撃したフィエスタの側面が、文化施設の建設、映画
祭の創立、各種国際会議の開催、ミス・ユニヴァース大会などの形
をとって、有効な海外からの投資を喚起する環境整備の名のもとに

「大盤振舞い」として消えることなく続いてゆく。その結果一九七〇
年代後半から、新しい行政主導型の大規模なフィエスタの創成な
いしは伝統的なフィエスタの改組が盛んに行なわれるようになる。

その一例が一九八〇年からセブ市で始まったシヌログ祭りである。
フィリピンにおけるカトリック布教の発祥の地であり、効験で名高
い幼きイエズス（サント・ニーニョ）の聖像の所在地でもあるセブ
の伝統的な重要性に立脚し、新たに中央官庁の支部と市当局が中心
となつて組織したシヌログ（本来はサント・ニーニョに対する願か
けのダンス。そのさらなる起源はマレー系あるいはムスリム教徒の
舞踏に求められるともいう）は、伝統的に教会中心に行なわれてい
た聖ニーニョのフィエスタ（たしかにきわめて古いものだが、ニー
ニョ信仰が今日の隆盛を得たについては、一九五〇年代後半に始ま
つた聖ニーニョ崇拜に関する儀礼上および制度上の整備によること
ろが大きい。その意味で、これは一見セブのカトリック教化以来絶
えることのない文化伝統とみえるが、今日の隆盛を生み出すに至つ
た起源は新しい）と時期を一致して実施されている。大々的なパ
レード、さまざまなコンテストや芸能の提供、そして勸業および産
業の振興会を含むこのプログラムには、官民あげて有力な市民が参
加し、また観光客を数多くひきつける。これは数多くの見物人と、
職場集団、学校、教区などを単位とする大規模な参加を特徴とし、
必らずしも家庭のレベルでの社交や相互性の面では他のフィエスタ
と比較して活発ではない。いわば見物と参加がはっきりと区分でき
る都市的な行事といつてよい。開始以来、成功し定着しつつあるこ

の行事に対し、いくつかの批判も寄せられている。それは、「進歩のためのフィエスタ」といった観点からの政策的なものではない。とこのシヌログ・フィエスタの開始こそ六〇年代のフィエスタ批判の結果といってもまちがいはないからである。

一つの批判ははじめ市当局の公金がこのフィエスタの支出をまかなうために利用され、しかもそこに使途不明金が見つかったことに對して向けられている。これはまた税金の浪費あるいは行政当局親マルコス派といった党派主義の過剰であるとする意見もみられ、その結果八一年より、直接行政が窓口となることを止めて、民間人と行政側の双方から構成される委員会の組織が誕生している。

シヌログをめぐる論争にはそのほかに、祝祭開催のために生ずる交通規制、騒音に対する不満、さらに祝祭といつとも市民の自主的な参加が困難で、すべてが行政、企業、教育等の諸機関を単位とする参加に限定されがちである点への批判が含まれている。もともと聖ニーニヨ像を保持し、日常的な信仰とフィリピン各地からの巡礼の中心になっているセブのオーガスティン派の修道院はフィエスタの宗教的側面の強化に意を用いており、教会外部での活動に対しては留保つきで認めるとの立場にたっている。

同じヴィサヤ地方パナイ島北部のアクランの伝統的なアティ・アティ・ハンフィエスタをモデルに創成されたシヌログと、パナイ島南部イロイロ市のフィエスタはいずれも聖ニーニヨへの信仰を基調にしており、一月のほぼ同じ時期に開かれる。現在、この三つの大フィエスタの時期を調整し、短期間に日を重ならせずすべてを一

巡できるようにする計画があり、その観光化にさらに拍車がかかる状況が存在する。都市全体を巻き込む大規模なフィエスタはこうした状況を避け難いし、またそれを目的として拡充されたり、ルソン中部の避暑地バギオを会場とする山地民のフィエスタのように新しく創設されることが多い。

一九六〇年代のフィエスタ論争は個人による「浪費」と、「進歩」に向かう精神の欠如を戒める方向性をもっていたが、その結果一九七〇年から八〇年代初めにかけて、当時の政治状況と文化政策を背景として行政の介入がきわめて大きくなる事態を招き、最近では、いわゆるニセ物の民族文化やアイデンティティを観光および中央政府の政策のために切り売りすることへの山地民の側からの批判に象徴されるゆり戻しが起きつつある。

そうした事情を踏まえて、ここで行なった覚書としての報告は、ありうべきフィエスタ本来の形を求めることが目的ではなく、むしろフィエスタが幅のある表現枠組としてとりうるさまざまな可能性（良きにつけ悪しきにつけ）と、文化現象としてそこに政治、社会状況が直に反映し、変形可能性を強くもつ点を示す意図をもっていった。当然フィエスタ論としては、その変化する部分と変わりにくい構造、一つのフィエスタの全体的な把握を行なうことが必要であり、それは今後の課題としたい。

参考文献資料

Briones, C., 1983, "Life in Old Parian", Cebuano Studies Center, University of San Carlos, Cebu.

- Carmen Town Fiesta Program, 1983, Carmen Town, Cebu.
- Hart, D., 1959, 'A Note on Philippine Fiesta Complex' "Silliman Journal"
Vol. 10, Silliman University, Dumaguete.
- Mallari, I. V., 1954, "Vanishing Dawn", Philippine Education Company,
Manila.
- Manglapus, R. S. (R. の マングラプス) 一九七五年, 「フィリピンの文化と近
代化」(佐々木宏幹訳) R・ベラー編, 『アジアの近代化と宗教』所収。
- Sinulog sa Sugbo Program, 1980, Cebu.
- Sinulog '82 Program, 1982, Cebu.
- <その他新聞および一般雑誌記事>
- New Philippines, 一九七四三月、マニラ。
- Philippine Free Press, 一九六二年一月二四日、一九六九年二月一日、
マニラ。
- Sunday Times Magazine, 一九六三年二月一〇日、マニラ。
- The Freeman, 一九八〇年二月一〇日、一一日、一四日。一九八一年
一月一四日、二〇日、二三日、二四日。一九八二年二月二四日、
マニラ。